

「エコシティたかつ」推進フォーラム開催結果（概要版）

日 時：2012年2月26日（日）13:30～16:00
 場 所：高津区役所5階会議室
 来場者数：約50名

プログラム

- 1 開会 あいさつ 船橋兵悟（高津区長）
- 2 第1部
 - (1) 「たかつエコ・エネライフコンクール2011」表彰式
 - (2) 基調講演「NEC インフロンティアの取組み」酒井富雄氏
 （NEC インフロンティア（株）事業営業部 環境管理センター マネージャー）
- 3 エコ落語 喜楽亭 笑吉（社会人落語家）
- 4 第2部 <「エコシティたかつ」推進フォーラム>
 - (1) 「エコシティたかつ」2011年度実施報告
 - (2) パネルディスカッション
 「高津区にあるビオトープから流域の自然の賑わいを」
【コーディネーター】 岸由二氏（慶応義塾大学経済学部教授）
【パネリスト】 小林茂登氏（西梶ヶ谷小学校校長）
 徳武道雄氏（高津区市民健康の森を育てる会会長）
 船橋兵悟（高津区長）
- 5 閉会后、第3会議室で交流会

第2部 <「エコシティたかつ」推進フォーラム>

◆コーディネーター挨拶（慶応義塾大学経済学部教授 岸由二氏）

高津の100年計画、ビジョンは大きい。去年は震災があり、原発の問題があまりに大きくて、他の諸問題が見えなくなっている。

エコシティたかつの目的は、エネルギー節約だけではない。エネルギー節約、豪雨対策、生物多様性に三位一体で取り組んでいる。国家ではなく、高津区がその先陣を切っている意味は大きい。



◆パネルディスカッション

「高津区にあるビオトープから流域の自然の賑わいを」

【コーディネーター】 岸由二氏（慶応義塾大学経済学部教授）

【パネリスト】 小林茂登氏（西梶ヶ谷小学校校長）

徳武道雄氏（高津区市民健康の森を育てる会会長）

船橋兵悟（高津区長）

<報告>

①西梶ヶ谷小学校の学校ビオトープの報告（西梶ヶ谷小学校校長 小林茂登氏）

西梶ヶ谷小学校のビオトープは、水深が20～30cmの四角形で簡単なもの。小学校に前からある池は、コイや金魚など人間が鑑賞するものを飼っているが、ビオトープでは、外から来る生きものを自然にそのまま活かしている。壁側に雨水装置をつけ、屋上から流れる雨水をビオトープへ入れたり、植物を育てるのに使っている。



南原小学校でもこの間、ビオトープの整備が行われた。やはりビオトープは簡単なものだが、周りをきれいにし、日が当たるようにすると良い環境ができて、小動物がきたり、トンボがくるようになる。冬でも、ヤゴや小さな水生昆虫がたくさんいた。

学校流域プロジェクトは、学校と学校の点を結んでいき、小動物達がその間を点々と動きながら暮らしていける環境づくりを目指している。ミズスマシやゲンゴロウがいて、子ども達には、驚きと発見があり、それが学校外に繋がっていき、ネットワーク化していく。

②「たかつ水と緑の探検隊」のモデル実施の報告（高津市民健康の森を育てる会会長 徳武道雄氏）

高津区市民健康の森を育てる会では、農作業としては、じゃがいも、里芋、さつまいもなどを栽培しており、農園としてはバラ、菊、あるいは季節の花を育てている。他に竹炭焼き、ホタルやカブトムシの飼育、草刈り、落ち葉拾い、植樹や伐採などを楽しみながら行っている。会員だけで作業するのではなく、広く公募している。



1月12日、26日には、エコシティたかつ推進会議と連携し、たちばな健康の森の2つの谷戸を対象に「たかつ水と緑の探検隊」による調査や作業を実施した。谷戸とは小さな谷地形のことで、健康の森では、緩やかな谷地を中心に雑木林が広がっている。谷戸は自然を管理する上で規範となる大切な場所。谷戸の管理によって、水害や土砂の流出、生物が棲みつく環境ができるかが決まる。

雑木林では、シロダモやアオキなどが増えていた。森に光が入らなくなり、下草が育たなくなるなどの課題がある。また、要注意外来植物に指定されているトキワツユクサが増えていることも確認した。増えるとユリやランが芽を出せなくなる。1月26日には、トキワツユクサを駆除する作業を行った。今後も、健康の森の日常の活動の中でも取り組んでいきたい。

③エコシティたかつ推進事業について（高津区長 船橋兵悟）

エコシティたかつの推進方針をつくったのは2008年度末。高津区がエコシティを前面に出して、地域の小学校や市民団体と横につながっていることは、行政の中では珍しい取り組み。このように区役所の地域連携の施策は、分権型で良いと思っている。その1つのモデルがエコシティたかつだと思っている。皆さんとつながることによって、役所の縦割りをわすれて、1つのテーマで地域から発信していくことができる。



私は多摩川の崖線にある武蔵野の固有種が何かということが気になっており、岸先生に市民健康の森を一度診断してもらいたいと思っていた。そのなかで市民健康の森の次のステップが見出せると良いと思っていた。

<ディスカッション>

環境学習の難しさについて（西梶ヶ谷小学校校長 小林茂登氏）

子ども達は、ビオトープをどのように使ってよいか、なかなかわからない。ギンヤンマが飛んで来て、水辺をお尻で打つのをみると、子ども達は感動するし、環境学習で棲んでいる生物を調べると、大事にしたいという思いが芽生えるが、そこまでが大変だ。カエルなどが池から上がってくると全部取り尽くしてしまう。子ども達の生物に対するバランス感覚、共生しているという感覚を育てることが難しい。大事に育てていくことを教えていきたい。



コメント（慶応義塾大学経済学部教授 岸由二氏）

小学校の3年生の頃は生きものを捕まえたい、触りたいという激しい本能がある。それを否定せずに破壊的にならないようにうまくコントロールしてあげるのがコツ。5、6年生になるとケアする側に回り、1、2年生は良くわからない、そして3年生が面白がって生き物をとるという構図を如何にうまく利用するかだと思う。

トキワツユクサの駆除について（高津市民健康の森を育てる会会長 徳武道雄氏）

ふれあいの森の調査で、外来種であるトキワツユクサがたくさんあったことに本当にびっくりした。春日台公園にもあるのではないかと思うので、活動の中で早めに見つけて、駆除していきたい。

できれば水と緑の探検隊の第2弾を発足して、岸先生



や皆さんにお知恵を拝借したい。

コメント（慶応義塾大学経済学部教授 岸由二氏）

トキワツユクサが蔓延しているところを丁寧に駆除しておくところから春になり、雑木林の美しい花をつける植物が出てくる。ぜひ細かい目で見てもらい、助けられるものを助けてほしい。

エコシティたかつの展開について（高津区長 船橋兵悟）

一昨年、円筒分水のそばの二ヶ領用水があふれた。都市化が進み、保水能力が大幅に下がっているのだろう。二ヶ領用水の水面を残し、100年後の高津区に水と緑をどれだけ残せるかが大切だと考えている。

3. 11を受けて、エコシティたかつの取り組みは、覚悟を持ってやっていかなければならないステージに来たと思っている。



まとめ（慶応義塾大学経済学部教授 岸由二氏）

現在は、文明とセットになった地球が病気。我々と地球との関係が病気。これには、雨の降る大地が流域という細胞のようなもので出来ていることがしみじみ解らないと対応できない。流域はアマゾン川のような大きなものもあるし、西梶ヶ谷小学校のような小さいものもある。庭で足を蹴れば、そこにまた小さな流域ができて、その全てに温暖化適応策と生物多様性の課題がある。

エコシティたかつは、1000年まで通用するような基本の暮らしのスタイルを築くようなものになって欲しいと願っている。